
変わり者とテストと召喚獣

九十九迅雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変わり者とテストと召喚獣

【Nコード】

N6773W

【作者名】

九十九迅雷

【あらすじ】

冷泉和音は昔から非の打ち所のない、何でも出来る万能人でルックスも学力も良とされてきた、いわゆるエリートのような存在だった。

しかし、彼の文月学園での2年目は、波乱が起きそうだった。京都の本家に呼び戻されており、振り分け試験を受けなかったのである。それが意味するもの、つまり、和音が2年Fクラス《負け組》に所属するということ。

当の和音はというと、面白い方が断然いいから大歓迎だと大喜び。受けていればAクラス確定のはずの彼だから、落胆しているだろうと考えていた鉄人こと西村教諭をはじめとする周りは騒然。

この物語は、負け組になっても学ぶことがある。それを証明するために奔走する和音と、その仲間たちの日常を描いたものである。

第0門 序章 和音の転機（前書き）

始めまして。 九十九迅雷と申します。

本作は初めて「小説家になろう」に投稿する作品です。

文章力のなさが随所に見られますが、温かい目で応援していただけるとありがたいです。

また、あまりプロットは組まない主義なので、どうしても遅筆になりがちですので、ご了承ください。

よろしく願います。

第0門 序章 和音の転機

Side 和音

僕、冷泉和音^{れいせんかずね}は昔から非の打ち所のない、何でも出来る万能人でルックスも学力も良とされてきた、いわゆるエリートのような存在だったらしい。

だけど、そんな生活が退屈で、苦痛だった。何も楽しげなことが起こりやしない。

だから僕は自分から変わろうと思った。というか、変わり者になりすぎて、少し変人の烙印が押されかけたくらいだ。

でもやっぱり退屈な日常は続いて行く。無限ループの中に居るような感覚だった。

いつもワーワーギャーギャーやっている吉井君たちが、結構羨ましかった。

そんな中、僕にも転機が訪れた。京都の実家に呼び戻されたのだ。振り分け試験を受ける日だったから、僕は2年Fクラスに入ることが確実となった。

鉄人と呼ばれて生徒から親しみを受けている（先生本人は嫌がっているけど）西村先生も、僕がFクラスに行くことを残念がっていた。「楽しい事が多そうだから、自分としては、AクラスよりもFクラスの方が良いです」

と言ったのを聞いて、苦笑しながら了承してくれた。僕にとっては信頼する先生だ。

明日から、新学期が始まる。振り分け試験の日から昨日までずっと京都に居たから、早く寝とかなないと。

そうして僕は眠りについで。
見て。

明日から始まる楽しい学園生活を夢

第0門 序章 和音の転機（後書き）

プロローグです。

慣れないので、変な箇所とかもあるかもしれませんが、がんばっていきます。

主人公紹介（前書き）

迅雷です。今回は主人公について紹介します。
あとがきでは早速やりとりをします！

主人公紹介

【名前】 冷泉和音

【読み】 れいせんかずね

【性別】 男

【誕生日／年齢】 1月12日／16歳

【体格】 167cm、51kg

【好きなもの】 友達、鉄人（尊敬の念）、甘味、面白いことならなんでも。

【嫌いなもの】 友達や好きな人に危害を加える人間、つまらないこと、女扱いされること。

【性格】 天然で温厚、純粹、人当たりの良い明るい性格。 アットホームで人懐っこい。

【髪】 肩口くらいの長さを縛る。 色は白と銀の中間あたり。 怒ると針金みたいに鋭くなることもある。

【瞳】 アルビノのような赤い色で、眉は髪と同じような色。 角度は少したれ気味。

【顔】 中世的で女っぽい美形。 イメージ的にはインフィニットストラトスのシャルミみたいな感じ。

【得意教科】 英語、古典、日本史

【苦手教科】 現代国語（といっても、一番点が低いだけで、実際は300点台）

【備考】 京都の名家の跡取りらしい。 血筋が戦国時代くらいから続く。 教育が厳しかったこともあり、一応喧嘩も強い。

家族が多く、兄弟は兄2人、弟1人、姉1人、妹2人。

合わせて6人。 合計で7人兄弟。

面白いことが大好きで、そのため行動力は人一倍。 テストで面白がって珍回答をすることもある。

声が少し高く、感嘆したときの声は女性そのもの。 例）

「ふええ」「ひゃあ」など。

高1の途中に明久の住むマンションに引越し、1人暮らしをしている（明久はお隣さん）

勉強、容姿、性格、運動、家事に渡って広い範囲で才能を発揮しており、皆からは完璧超人と思われる。

中学2年から高1の前までアメリカに留学。英語力は教師レベルを超えているらしい（TOEIC1級取得

勉強は最高で700点台（本気を出すと800まで行く可能性も）苦手なもので300後半。

今まで様々な女子に告白されてきたが、すべて断っている。普段は柔らかな雰囲気だが、怒ったときは関西弁が飛び出すことも。キレたときは鉄人すら止めるのに一苦労。

本気を出す時は赤いヘアピンで前髪をかき分ける。

無理やり女装させられたことがあり、そのせいでFクラスをはじめとする男子や、多くの女子にそのときの写真が売れていた、女の子扱いされる。

本当に喜んだときだけに見せる笑顔は異性どころか“同性”をも魅了する危険な可愛さ。

また、笑顔だけでなく、涙目の上目遣いも破壊力抜群。

両方とも、まともに見た人間は彼の虜になる。

個性の強すぎる家族とクラスメイトたちに振り回されている苦勞人。

召還獣

【容姿】 本人をそのまま縮めた感じ。 袴姿で、格好は秀吉と一緒に。 下は赤で、色違い。

【武装】 日本刀二刀流

【腕輪】 青銅の腕輪

【腕輪効果】 味方の点数を自分の削った点数の二倍あげることが出来る。

例) 60点のクラスメイトに自分が20点削ると40点プラスされるのでクラスメイトは100点に。

主人公紹介（後書き）

和「皆さんはじめまして。 冷泉和音です」

作者の迅雷です。 あとがきでは和音をはじめとする皆の雑談と次回予告をします。

和「ところで迅雷さん？」

ん？ 何？

和「僕の設定結構行きすぎじゃないですか？」

まあ、そりゃあ、エリートって設定だからねえ。

和「それを含めてもですっ」

あはは…。

まあ、次から1話だから、頑張ろうね、ね？

和「わかりました。 では皆さん、また今度の機会にお会いしましょう！」

第1門 僕と隣人と新学期（前書き）

迅雷です。 記念すべき第1話、書かせていただきます。
高校生の文章力ですので、なにかアドバイスや感想をいただけると、
そこから改善していく余地がありそうです。

第1門 僕と隣人と新学期

和音Side

じりりりり！　じりりりり！

「うゝん」

呻きながら目を覚ました。　　というか、なんか凄まじい轟音が頭に響いてくるような…。

でも、僕は目覚ましなんか使わないはずだし…。　お隣さんかな？

『8時前！？　遅刻だー！』

心なしか、慌てたようなトーン。　　8時前？　遅刻？

ということとは……？

「僕も遅刻しちゃうっ！？」

なんでこんな時間に…。　昨日早く寝たはずなのに。

いや、待てよ？　父さんや兄弟たちのメールが夜中に来て、それを返信していたからかな。

なんてこった、あの無駄に大きい家族め。　何かあるのかと思った
ら、

というか、1人で頑張れって送り出した身なら、夜中の3時にメールするんじゃないよ。

しかし、こうしている場合じゃない。

僕は冷蔵庫から愛用のアルミパック入りゼリー飲料（150円でこれは使える）を取り出して飲みながら制服に着替えた。

そこから鞆を取って玄関のドアを開け、鍵を閉める。　うん、ちなみにこの間15秒だよ。

「あれ、冷泉君？」

隣のドアから僕と同じく顔を出したのは、茶髪のショートカットにパッチリした目。

ある意味で同じ文月学園の有名人、吉井明久君。

彼とは隣室だったりする。先ほど僕を起こしてくれた目覚ましも、彼のものに違いない。

「おはよう吉井君」

「あ、おはよう」

って！

「「こうしてる場合じゃないいいいい！ 遅刻するうううううううううう！！」」

お互いに考えてたことは同じだったみたい。

S i d e O u t

明久S i d e

朝、何度鳴ったかわからないくらい目覚ましでやっと目を覚ましてから、僕は今学園トップクラスの美少女：美男子とともに、学校に急いでいた。

いやあ、横目で見てみると、やっぱり冷泉君は可愛い。 兎なんて表現をされるのもわかるけど、行動は気品あふれていて、いろいろな人から一目置かれている。

しばらくそんな兎と一緒に走っていると、見えた。

我が文月学園の校門と、浅黒く光る巨漢が。

「遅刻だぞ、吉井、冷泉」

S
i
d
e
O
u
t

第1門 僕と隣人と新学期（後書き）

中途半端なところで切ってすいませんー！
和「まったくですね」

ま、まあまあ、読んでくださる人も居るかもしれないんだから。
和「そんな問題じゃありません！」
ん？

和「どうして僕はいつも女性に見られるのですか!?!」
容姿のせいだよ。君は悪くない。
それよりもメールの内容ってどんなの？
和「話しそらしましたね…。言いたくないので、次の話の時に言いますから、今は勘弁してください」
オーケイ。

では、皆さん次の機会にお会いしましょう。
和「See you!（ニッコリ）」
やっぱりこの笑顔は女性だよ…。

第2問 僕と和音とクラス発表（前書き）

うおおおおおおおお！ （阪神の葛城選手！ なんかごめんなさい！
お気に入りが6件！？

これはとても嬉しいです。 今ニヤけまくってます。
登録してくださった皆様、ありがとうございます！

今日は2話を更新します。

第2問 僕と和音とクラス発表

和音Side

「遅刻だぞ。 吉井、冷泉」

僕と吉井君の前に立ちはだかる、褐色の肌と服の上からでもわかるような恵まれた体格の先生。

西村宗一教諭だった。

「あ、おはようございます鉄じーじゃなくて、西村先生」

吉井君、相手は西村先生です。 下手すると補修だよ。

「おはようございます、西村先生」

ニコッと笑って挨拶をすると、先生も豪快な笑みを返してくれた。

「冷泉は良いが、吉井、今鉄人って言わなかったか？」

「ははっ、気のせいですよ」

吉井君、笑ってごまかした!?

「まあ良いが…。 それにしても普通『おはようございます』じゃないだろうが、お前らですよね…。」

「あ、すいません。 えーっとー今日も肌が黒いですね」
吉井君何言ってるんだ!?

「先生、遅刻して申し訳ありませんでした!」

先生は僕の発言に概ね満足したらしかった。

「吉井…。 お前は謝罪より俺の肌の色の方が優先なのか? で、吉井はともかく、冷泉はなんで遅刻したんだ?」

うう…。 説明したくない。

「えっとですね…。 親や兄弟がメールしてきて、その返信をしたり、内容に結構恐怖を覚えたりで、眠れませんでした」
「どんな内容だったんだ?」

あまり言いたくないですが……。先生には言うしかないさそうですね。
「先生、もし、親から『今からお前の弟か妹を作るぞ！ 名前は名前が決めてくれ！』なんてメールが来たら、怖くないですか？」
先生は少し縦線を浮かべたあと、すぐに謝罪した。

「じゃあ、とりあえずお前たちのクラスの発表を渡すぞ」
自分は関係ないですね。 本家に帰ってたし。

「吉井……。俺はお前がもしかしてバカなんじゃないかと思っていた」

「やだなあ先生。 やっと認識を変えてくれたんですね」
手渡された茶封筒をあける吉井君。

「そうだな……。 お前は、真正正銘のバカだ！」
吉井君の手元をみると、Fクラスとあった。 その瞬間、僕と吉井君の最下クラス入りが決定したのである。

「冷泉は……。 先生は非常に残念だ。 お前の学力なら、Aクラス
確定だったろうに」

「いえ、先生。 僕は面白そうなFクラスのほうが大歓迎ですよ」
啞然とする西村先生に、失礼しますと一言告げてから、僕と吉井君は教室に向かった。

先生の顔は、信じられないものをみたとき人間がする表情そのものだった。

「でもすごいよねー冷泉君は」
吉井君が廊下を歩く途中、話題を振る。

「和音で良いですよ。 僕のことは、同じクラスになったから、和音と呼んでください」

「わかった。 じゃあよろしく、和音。 僕のこと明久で良いよ」
「よろしくです。 明久」

僕たちはそんな他愛もない会話をしながら、Fクラスのある校舎に

歩く。

その途中に目に入る、
だだっ広いホテルのような教室、
Aクラスだ
った。

第2問 僕と和音とクラス発表（後書き）

かなりのスローペースですいません！
台風に備えます。失礼しました。

第3問 僕と皆のFクラス（前書き）

ご無沙汰してます。

どうも、迅雷です。

試験前なので、きびしいっすね…。

第3問 僕と皆のFクラス

和音Side

Aクラス教室では、前に高橋先生が立っていた。

「クラス代表を紹介したいと思います。代表の霧島さん、前に出てきてください」

おお、Aクラスの代表は霧島さんみたいで。

彼女は1年の頃よく点数を競ったライバルのようなものだ。そして、彼女は僕の良き友人でもある。

まあ、その件はまた別の機会に。

「霧島翔子です。よろしくお願いします…」

和人形のような美しい黒髪に、クールな印象を持たせる容姿。所謂、美少女ですね。

「Aクラスの皆さん、これから1年間…」

高橋先生が喋り始めたとき、僕は気付いた。

「あ、明久君、僕らも教室に急ごう。遅刻してるので、早めに行って謝っちゃいましょう」

「あ、うっ、うん！ そうだね和音！ 早く行こうか」

案の定、明久君はAクラスの豪華設備に目を取られていたようで。

長い直線の廊下を歩くと、目的の場所に到着した。

でも、これ、廃教室では？ なんか、学年とクラスが記されたプレートにはひびが入ってますし…。

あ、Fのシールが剥がれちゃった。って、やっぱりEクラスの廃教室じゃないですか、ここ。

遅れても、大丈夫ですよ！？ 皆良い人ですよ…。

多少不安です。

僕をよそに、吉井君は能天気に対アを開ける。

「すいません。ちょっと遅れちゃいましたっ♪

「早く座れ、このウジ虫野郎」

「な!？」

あ、先生は居ないみたいです。

「聞こえなかったのか、ああ？」

なんとまあ…。180cm強の身長にボクサーのような筋肉質な体付き。彼はたしか…。

「…雄二、何やってんの？」

坂本雄二君だ。

昔は神童と呼ばれていたらしいけど…。

「ん、まあ、俺がクラス代表だからな」

と言うことは、クラスで一番成績が高いんですね。わかります。

「あ、自分も居ます」

慌てて僕の存在を示す。

「って、冷泉!？　なんでお前がFクラスなんだ？」

まあ、事情知らない人からしたら、驚きますかね。

「試験期間中、京都に帰っていたのです。まあ、手続き的なものがあつたので」

「そ、そうか…。お前がウチのクラスなら大変心強い。1年の学年主席だからな。でも、良いのかよ？　お前はAクラスじゃなくて」

あれは普通に過ごしててなっただけなのですがね…。

まあ、あれから自分は注目されてしまったのですが。

「Fクラスの方が面白そうです」

「お前…。相変わらず変わってるな…」

坂本君が軽いため息を付いた。

第3問 僕と皆のFクラス（後書き）

中途半端ですいません。

とりあえず更新しておきます。

和音「これからもこの作品をお願いします」

第4問 里帰り詳細（前書き）

ご無沙汰しております。

文化祭的な行事が近く、またROM専状態になるかもです。

第4問 里帰り詳細

和音Side

文月学園振り分け試験が行われていた日、僕は実家のある京都府に里帰りしていた。

振り分け試験の日から来いというのはかなり無茶な話だったけど、いい加減エリート呼ばわりされてうんざりしていた僕にとっては好都合。

まあ、試験に出ても白紙提出するつもりでしたが……。

京都の古い街並みは、今も昔も変わらぬ風情のあるものだった。

でも白昼歩いている舞妓さんは大概、観光客の人たちの舞妓体験だったりする。まあ、夜に出歩く芸子さんが昼間に歩くのもおかしい話だよね。

と、駅から歩いて20分くらい。1年ぶりに我が家に帰ってきた。

正直、あの家族たちが居るから僕は、入りたくはない。

「あ、和音ちゃん」

入ろうか悩んでいた僕の耳に、聞きなれたのほほんとした声が入る。正体は知っているけど、とりあえず後ろを向こうか。

「風音姉さん。ただいまです」
かざね

目に入っただのはカジュアルな格好をしている僕の姉さん。白い髪をショートカットにしている。

実姉ながら結構美人だと思います。

まあ、こういうのはほんとした雰囲気は親譲りです。身長は僕よりも2センチくらい低い。

僕の3つ年上の風音姉さんは今は京都の大学に通っている。こう見

えても、文月学園を主席で卒業しているから驚きですよね。

「うん、おかえり。とりあえず中に入って。積もる話もあるしね」
風音姉さんは僕の肩を持って、背中をやさしく押していった。

「皆々！ 和音ちゃんが帰ったわよう！」

と、風音姉さんが言うのと、どたどたと地響きのような音がした。

「「お帰り！ 和音兄！」」

笑顔でそういったのは妹の天音ちゃんあまねと凜音ちゃんりんねの双子。2人とも風音姉さんをそのまま小さくしたような見た目の女の子です。
……実際は僕の2つ下の中学生ですがね。2人とも僕によく懐いてくれます。兄としては嬉しいです。

「和音兄さん……お帰りなさい」

静かに言ったのは3つ下の弟の和貴君かずたか。見た目は眼鏡を掛けていて、知的な、所謂イケメンだと思います。

「よう和音！ 相変わらず美人やなあ！ はっはっは」

「まったくだね、女の子だったら近親とかほっぴらかして襲ってしまいたいよ」

背筋が凍りそうな事を言う2人は僕の兄さん。

先の関西弁の方が3つ年上の和義兄さんかすよし。こんな感じでも京都でもトップクラスの大学2回生です。

後のもっと震えそうな事を言ったのは1つ上の和雅兄さんかずまさ。

彼は大阪の私立高校に学費免除で入学していて、今日は僕と同じく帰ってきているみたい。

2人とも僕とは違って男っぽい見た目だから羨ましいです。

こんな感じで、女性人は「音」、男性人は「和」という字が必ず使用されているのですが、

僕の場合は女の子みただったから2つを合わせたそうです。自分

にとつてはものすごく複雑でしたが…。

その名付け親が現れませんね。家の頭主なのに。

「あ、父さんと母さんならいま、台湾に行ってるわよ。兄さん」

僕の考えていた事を組んだのか、天音ちゃんが僕に言った。

そうか、相変わらずあのバカップルさんは…。

第一。今回僕が里帰りしたのはあの人たちに呼ばれたからなんですけどね。

……何の為に里帰りしたのか、わからない1日でした。

第4問 里帰り詳細（後書き）

書き終えましたが難しいです。
これから頑張って書きます。

＞はるさん

感想ありがとうございます。

ご期待に添えるように頑張ります。

ちなみに和音は見た目男の娘、中身男前な男の娘です。

第5門 冷泉和音の憂鬱（前書き）

里歸りの話も終わったので、Fクラスのほうに戻ります。
和音の口調についてですが、敬語と標準語が混じる喋り方をしています。

この点も変わり者と呼ばれる原因かもしれませんが。では本編どうぞ。

第5門 冷泉和音の憂鬱

和音Side

「とりあえず、これで冷泉を含めたこのクラス全員が俺の兵隊だな」
ふんぞり返って床に座る生徒たちを見下ろし、坂本君は言った。

——そう。クラスメイトの皆さんは床に座っていました。

何故かって？ そもそもこの教室に椅子というものが存在していないのです……。

「流石はFクラスですね」

僕は苦笑を浮かべつつ空いているスペースを探した。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

覇気が無い渋い声が聞こえた。

後ろを振り向いて見ると、寝癖のついた髪形によれたシャツを着ている貧相な体つき。冴えない風体のおじさんがいます。

多分この人がFクラスの担任の先生なのですね。面白そうな人です。

「それと席についてもらえますか？」

ホームルーム
HRを始めますので」

「はい」

「うーっす」

「わかりました」

先生に言われて僕、明久と坂本君はそれぞれ席につく。福原先生はそれを待ってから壇上でゆっくりと話し始めた。

「えー、おはようございます。私が2年F組担任の福原慎です。よろしく願います」

福原先生は黒板に名前を書こうとして——やめた。ふええ、チヨークすらまともに用意されてないんですか。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？ 不備があれば申し出てください」

およそ50人もの生徒がいるのに机がひとつもありません。
あるのは卓袱台に座布団のみ。昭和のドラマじゃないんですから……。

1年生のとき噂には聞いていましたが、正直ここまで面白い設備だとは思っていませんでした。

「せんせー、俺の座布団にほとんど綿が入ってないですー」
クラスメイトの誰かが先生に設備の不備を申し出る。

「あー、はい。我慢してください」
えええ！？ それでは流石にかわいそうですよ。

「あ、僕の座布団と交換しますか？」
クラスメイトの子に同情して交換を申し上げたのですが……。

「あいつ美少女に座布団を交換してもらおうとしているぞ！」

「「殺せええ！！！」」

ふええ！？ なんて皆さんして覆面被って襲い掛かってるんですか
！？ 明久まで！

「大丈夫だよ和音。君の座った座布団を守るよ」

「なに意味不明な事を言ってるの！？ 自分男ですよ！」

親指を立てて言う明久に必死で言ったら皆止まってくれました。何故自分は男と見られないのでしょうか……。

第5門 冷泉和音の憂鬱（後書き）

あいかわらず男として扱われない和音ちゃんです。

和音「迅雷さんまで“ちゃん”とか付けないでください！」

いやあ、もう完璧にシャルだね。Fクラスは養豚場だね。

和音「ふええ、無視ですか！！？」

ま、とりあえず、次の回で君の気持ちをわかってくれる人が出てくるよ。

読者の方々はもう知っていると思うけど。

和音「それなら面白そうなので、良いですよ」

次回の前にバカテスト集を書こうかと思っています。

和音「次回はもう少し後になりますかね？」

番外 バカテスト集1（前書き）

今回は原作第1巻に登場するバカテストを抜粋して載せます。
和音の珍回答に期待？

番外 バカテスト集1

【第1門】

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。』

このときの問題点とマグネシウムの変わりに用いるべき金属合金の例を挙げてなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

冷泉和音の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると酸化し燃焼を起こすため、主な使用者であるお母さんたちが火傷をしてしまいその子供たちが悲しむという点。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

残念ながら不正解です。しかし先生はこの解答を見て胸が温かくなりました。君は素晴らしい優しさと母性を持っているんですね。

冷泉和音の返答

いや僕男ですから母性は関係ないですよ！

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

【第2問】

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『（1）得意な事を失敗してしまうこと』

『（2）悪いことがあった上に皿に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

『（1）弘法も筆の誤り』

『（2）泣きっ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（2）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

『（1）弘法の川流れ』

教師のコメント
シュールな光景ですね。

吉井明久の答え
『(2) 泣きっ面蹴ったり』

冷泉和音の答え
『(2) 泣きっ面に鞭』

教師のコメント
君たちは鬼ですか。

【第3門】

問…以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly
y.」

姫路瑞希の答え
「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント
正解です。きちんと勉強していますね。

冷泉和音の答え
「これは私の祖母がいつも使っていた本棚です。」

教師のコメント
正解です。TOEIC1級の冷泉君には簡単すぎましたかね。

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

訳せたのはthisだけですか。

吉井明久の答え

「☆●◆▽「♪*×

」

教師のコメント

出来れば地球上の言語で。

【第4問】

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

冷泉和音の答え

『希望』

教師のコメント

君はたまにわざと間違えていませんか？
でも先生はその答え、嫌
いじゃないです。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

番外 バカテスト集1（後書き）

とりあえず4問掲載。

和音の場合は面白がって間違いの答えを書くことが多いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6773w/>

変わり者とテストと召喚獣

2011年11月15日06時12分発行